

## 沼津の小学校言語科「読解の時間」

導入3年 指導定着：自由に討論判断力養う

沼津市が二〇〇六年度、子供のコミュニケーション能力向上を図り、構造改革特区の認定を受けて導入した「言語科」が三年目の年度末を迎えた。このうち「読解の時間」の授業は、市内小、中学校で指導例がほぼ定着。来年度から授業で使用する独自の副読本も編集した。「沼津方式」として全国から注目を集めている読解の授業や新たに発行する副読本を追い、研究者から評価を聞いた。(東部総局・海野俊也)



▲赤ちゃんポストについて  
グループ討論する浮島小の読  
解力授業＝同小

「こんなものがあるから、親が責任を取らなくなる」「だけど、子どもにとって何が権利か考えるべき」一。赤ちゃんポストについて考えた浮島小六年生「読解の時間」の授業。班ごとに分かれた討論で、児童の鋭い声が教室中に響き渡った。

同小の羽田稔彦教諭（四一）が受け持つこのクラスで赤ちゃんポストを取り上げたのは、三日前に続き二回目。最初の授業は羽田教諭が新聞記事や親による実子殺しの件数を示したグラフを提示し、どう思うか話し合った。「赤ちゃんがかawaiiそう」との声が強かったという。

二回目は前回の資料に加え、一九九四年に日本が批准したユニセフの「子どもの権利条約」を読ませ、あらためて「赤ちゃんポストで子どもは守られるか」を班ごとに討論させた。引き続き批判も目立ったが、「子どもの生活水準確保」を求めた条約の27条を取り上げ、「親が子を守れなければ、国が協力するとある。国が認めれば、赤ちゃんポストで子どもは守られると思う」（男子児童）など冷静な意見も出始めた。

一回目の授業で示した判断を変える児童も続き、羽田教諭は「感情だけで発言するのではなく、根拠をもって判断できる子が出てきた」と話す。

賛否を明らかに

床に座りこんで議論する児童、隣では後ろ向きに座った女子と男子の熱い論争が続く。

一見無秩序に見えるが、司書教諭の資格も持つ大岡南小五年生担任の加納礼子教諭（三七）の授業は、子ども同士が自由に意見を述べ合う「交流」の時間を多く使う。

ある日の「読解」授業では、静岡新聞の記事から「携帯電話で読める電子書籍が人気」の記事を取り上げた。書かれた情報を読み取らせ、ネームプレートを使って全員に「賛成」「反対」の立場を明らかにさせる。その上で、「交流」が始まった。

席が隣り合う同士とは限らない。子どもたちは自由に教室を歩き回り、黒板に示された自分と反対の意見の持ち主を見つけ、次々に議論を持ちかけた。「本を読む達成感がなくなる」「持ち運びに便利で、読書を始める機会になる」一。そのうちに当初示した賛否を入れ替える児童も。「交流」後の意見発表は発言を求める児童が相次ぎ、休み時間にまで及んだ。

「ふだん無口な子の意見を活発な子が積極的に聞きに行くようになった」と加納教諭。「交流」は読解以外の授業にも活用している。



## 各教科に普及を

ゆがんだ針が時を示す時計に、上方に伸びる階段。原中の浅倉博文教頭（四八）が受け持った二年生の読解授業は、同中の美術教師が描いたこんな抽象画の解釈をさせた。

「この時計、目盛りが8までしかない」と気付いた男子生徒は、「人生八十年と考えれば、今までの人生を振り返ったと考えられる」との見方を披露。下辺の暗い海と上辺の階段を根拠に「人が成長する姿を描いている」との女子生徒の意見には同調する声が続いた。

浅倉教頭は市教委で指導主事を務めていた〇五年、「読解」導入を推進した。現場で生徒指導に携わり、「"言葉"を使ったコミュニケーションができないことが、今の子どもたちがすぐキレる原因」と感じていたことが、提唱のきっかけとなった。

○六年度の導入から三年。「読解授業は、単独では成果が見えにくい」と浅倉教頭。国語に限らず美術、数学など各教科への普及を図り、「世の中にあふれるさまざまな情報を、客観的に取捨選択できる力につながれば」と期待する。

【◇ 言語科「読解の時間」2003年のPISA調査(OECDの国際学習到達度調査)で、日本の子供の読解力が2000年から低下し、国際順位も8位から14位と落ち込んだ。これらを受け、05年に成立した文字・活字文化振興法で「言語力」が初めて登場し、言語力の育成を求めている。沼津市は06年3月に国の構造改革特区の認可を受け、小中学校43校で「読解」と「英語」を二本柱とする独自の「言語科」を導入した。

08年度の授業時間は小1、2年が年15時間、小3-6年は20時間、中学生35時間。】

「グラフから事象読み取り・投書テーマに意見交換」



市教委編集の「副読本」

沼津市教育委員会が編集した言語科副読本は小学生用が、低中高学年それぞれ五十六頁、中学生用は全学年共通で八十頁。前半は「言語英語」、後半を「読解の時間」向けに構成した。

このうち「読解」に盛り込んだ素材は、いずれも市内の教諭が実践した授業例を、各学校の読解担当教諭や推進部員が持ち寄り吟味した。文章だけでなくへ表や図、地図、グラフなどに書かれた事象を深く読み取り、自分の考えを表現させる工夫を凝らしている。

主な内容は次の通り。

【小学校低学年】「なぞなぞ名人になろう」のページでは、なぞなぞ本に親しんだり、なぞなぞを作ってお互いに解き合ったりする活動を通し、言葉を手がかりに発想を広げる授業を提案する。「鳥獣人物戯画」を示し、それぞれの動物が言っていることを想像し、クラスで話し合う事例も掲載している。

【同中学年】「グラフ読解」ではコンビニで売られているアイスやおにぎりといった商品の売上高を示すグラフから、天気や曜日との関与を読み取らせる。沼津市と富士市の「ごみの出し方」ポスターを比較し、違いやどちらが分かりやすいか話し合い、大事な内容をどうしたら正しく伝えられるか学ぶページもみられる。

【同高学年】歴史上の有名人の資料を集めさせ、だれを総理大臣にしたいかのパネル討論を提案する。説得力を増すためにはどのような事実が必要か、どんな言葉を用いれば効果的かも考えさせる。「沼津の特産物をPRしよう」と、干物生産量全国シェア推移のグ

ラフや新聞記事の情報を読み取らせ、キャッチコピーや放送原稿をまとめさせる事例も載せた。

【中学生】新聞を利用した読解では、投書欄で同世代が主張することについて、共感できることやできないことを意見交換させる。その上で、身近な話や報道で感じた考えをまとめさせ、実際に新聞への投稿を勧めている。子どもの名前の推移を比較し、共通点や漢字に込められた意味を検討する授業事例なども挙げている。

## インタビュー

鶴田清司都留文科大教授



つるだ・せいじ氏 1955年山梨県勝沼町(現甲州市)生まれ。東大教育学部卒。96年都留文科大教授。全国大学国語教育学会常任理事

### 全国に先駆けた実践例に

沼津市が進める言語科「読解の時間」について、「『読解力』を高める国語科授業の改革」(二〇〇八年、明治図書)の著者で沼津市の小中学校にも度々、参観に訪れている都留文科大の鶴田清司教授に聞いた。

ー日本の子供の読解力は、本当に落ちているのですか。

「PISAのデータでいうと、〇三年は二〇〇〇年から平均得点が24点下がった。二〇〇〇年は調査対象に上位校が多かったとの指摘もあるが、落ち込みは間違いない」

ー理由は何でしょう。

「さまざまな要因はあるだろうが、基礎的な読み書き能力が十分でない生徒の増加が中心的理由とみる。PISAテストはレベル1未満から5まで6段階だが、〇三年はレベル1未満が拡大した。上位者はそれなりにいるが、格差が広がった。少し長い文章が多いPISAの問題を読めず、最初から放棄する生徒が目立ってきた」

ー沼津の読解授業をどう評価しますか。

「非常に注目している。これまで日本の子供たちがあまり指導されてこなかった『読解力』、つまりテキストを読むだけでなく、それに対して自分の考えをきちんと持ち、論理的に表現して他人と議論し、交流する力を育てている。受験勉強は問題を解いて答えるだけ。自分の考えを述べなさいというPISAの自由記述式問題には、日本の高校生の無答率が悲しくなるほど高い。こうした点で言えば、これまでの日本の学校教育は十分でなかつ

た」

一沼津方式は今後、どう広がるとみえますか。

「沼津の読解授業を参観しているが、やはり教科書がないので戸惑う先生もいる。沼津市教委が今回、独自に作成した副読本で、市内すべての教員が読解授業のイメージをつかめるようになる。

『読解の時間』で取り組むことは、すべての教科に還元できる。文部科学省が示した新しい学習指導要領も PISA を意識し、各教科で言語能力を高めるべき一としている。沼津の取り組みは、その先導的な実践例になるだろう」

(静新平成 21 年 3 月 22 日「NEWS 交差点(東部総局・海野俊也)」)